

万葉集「かぎろひの歌」と「吉野宮滝の歌」

天皇と日本、天武・持統 両天皇の国づくり 松浦利弘

序

日本の国には、神話時代から天皇という存在があり、国家の歴史はそれを軸として形成されて来た。天皇や日本という名称がまだ無かった時代は、「大王」（おおきみ）と呼ばれ、中国の史書では「倭」（む）と呼ばれたりして、「倭の五王」の時代などが呼称として伝わる。「五王」の最後の「武」が雄略天皇である。

齊明天皇の六六三年、百濟救済のため朝鮮半島に大軍を派遣した中大兄皇子（なかのおおえのみこ）は、白村江の戦いで唐・新羅の水軍に大敗して撤退した。その後逆に敵の侵攻に備えて九州の防衛を強化、さらに都を飛鳥から近江に遷し、即位して天智天皇となった（六六八）。それから三年余り、この国をどうするか。

強い意志を持って、「壬申の乱」を突破口に即位した弟の天武天皇（大海人（おおあま皇子））、その遺志を継承した持統天皇（鸕野讃良（うののささら）・天智の娘）、夫婦二人の君主による壮大な「国づくり」の歴史を振り返って見たい。折々の万葉名歌の政治的役割と彩（いろどり）も、又感慨新たなものとして甦（よみがえ）ってくる。

一、天武天皇の時代

(一)、天武天皇の即位と鸕野皇后の誕生

— 中央集権・律令国家の建設をめざす

六七一年十月、病床の天智（十二月三日崩御・四十六歳）から後事を託された大海人は、身の危険を感じてこ

れを固辞、出家して武器を朝廷に納め、逃げるように近江宮から吉野に退去した。大海人の歌がある。

み吉野の 耳我（みみが）の嶺に 時なくぞ 雪は降りける 間なくぞ 雨は降りける その雪の 時なき

がごと その雨の 間なきがごと 隈（くま）もおちらず 思ひつぞ来し その山道を（巻一―二五）

雪や雨が降り続く険しい吉野の山道、曲がり角ごとに物思いにふけりながら来た。逃避の悲壮感である。

隠忍八カ月、大海人は遂に決断して吉野を脱出、天智の子大友皇子との近江瀬田川での決戦に勝利し、六七三年奈良の飛鳥浄御原宮（あすかきよみはらのみや）で即位して第四十代・天武天皇となった（壬申の乱）。そして共に戦った妃（きさき）鸕野讃良を皇后に立てた（二十九歳）。武力によ



跡宮 御原 飛鳥 浄御原宮跡 (伝・飛鳥)

つて天下を平定した天武は、絶大な権力を掌握し、鸕野との「共治体制」で中央集権・律令国家の建設をめざした。（具体的な制度・施策は第四章参照）

(二)、皇親政治と「吉野の盟約」

天武は、政治から豪族を排除し宮廷に一人の大臣も置かず、鸕野や皇子（みこ）たちに任務を担当させた。いわゆる皇親（こうしん）政治（天皇と皇族を最高指導部とする政治形態）である。しかし後継者問題に頭を痛めた天武は、即位後八年鸕野と六人の皇子（すべて母が異なる）を伴い吉野宮に行幸した。

天武と鸕野の嫡子である草壁の後継者としての立場を明確にし、異腹の皇子たちの結束を図ろうとする目的だった。天武は、「争いの起（こ）らないようにしたいが、皆はどうか」と問いかけた。草壁が「異腹の兄弟であってもお互いに助け合ってゆく」と誓い、他の五人も誓いの言葉を述べた。鸕野も同じように誓盟した。これを「吉野の盟約」と言う。天武が示した歌がある。



吉野 神社 木神 (吉野) 大海人皇子が壬申の乱の時、木の陰で難を逃れた

よき人の よしとよく見て よしと言ひし 吉野よく見よ よき人よく見（巻一―二七）

昔のよい人（天武と持統）が、よいところだとよく見て、よいと言った吉野を、よく見よ、今のよい人（六人の皇子たち）よく見よ、と吉野を賛美し、これからもよく見よと強調している。ここまで強く誓約させたのは、嫡子草壁（十八歳）が凡庸、それに比して大津（十七歳）が優れていたからである。

(三)、「神」とあがめられた天皇

「壬申の乱」を勝ち抜き、新しい時代の統率者としての資質と能力を天下に示した天武は、「神」とあがめられた。乱のとき大海人の将軍だった大伴御行の歌。

大君（おほきみ）は 神にしませば 赤駒（あかこま）の 是（こ）らばふ田井を 都となしつ（巻十九―四二六〇）

わが大君は神であらせられるので、赤駒が腹這う田んぼを、立派な都にしてしまわれた。天皇を現人神（あらひとかみ）として尊び、その力と神性を讃えている。これは天武・持統朝に見られる思想で、持統については「天皇が雷（いかづち）の岡に出でませる時」と題した柿本人麻呂の歌がある。

大君は 神にしませば 天雲の 雷の上に

慮(いほり)せるかも (巻三—二三五)

大君は神であらせられるので、天雲のとどろく雷の上に、仮の慮(いほり)を建てていらっしやるよ。

(四)、天武天皇の崩御

吉野の盟約から一年、天武十年(六八一)二月草壁が皇太子に立てられ(二十歳)、名実ともに天武の後継者になった。それから二年後、天武は大津を朝政に参加させた。その年、草壁に嫡子珂瑠(かる)皇子が誕生した。従って皇位は将来、天武—草壁—珂瑠と継承される。

天武は大津を朝政に加えて、草壁を補佐する役割を期待したのではないか。だが、鷗野の大津に対する不安は去らなかつた。

その頃天武は病床に臥し、群臣たちに「天下の事は大小問わず、すべて皇后と皇太子に啓上せよ」と命じた。

そして天武は六八六年九月九日に没した(五十六歳)。鷗野悲しみの長歌後半部分を掲げる。

その山を 振り放(さ)け見つつ 夕されば あやに
悲しみ 明け来れば うらさび暮らし 荒栲(あら
た)の 衣の袖は 千(ち)る時もなし (巻二—一五九)

(わが大君が朝夕ご覧になっていた神岳の)その山をはるかに見ながら、夕方になるとたまらなく悲しくなり、夜が明けると心淋しく時を過ぎ(して)、喪服の袖は乾く間とてない。悲しみの凝縮感がある。

二、鷗野皇后称制の時代

(一)、鷗野皇后の称制と大津皇子の変

天武が没した後、鷗野は即位をせずに政務を執る「称制」となった。通常なら皇太子草壁を即位させればよいのだが、当時天皇となる年齢は三十歳という不文律があり草壁は二十五歳だった。

天武の遺骸を安置して殯宮の儀礼を行っているさな

か、十月二日に事件は起こった。大津の皇太子への謀反が川島皇子の密告で発覚、大津は捕らえられて、翌日に死を賜ったというのである。事件の真相は謎のまま、おそらくは天武の死によって不安になった鷗野の、謀略ではなかつたかと言われている。

かくして天武の殯(もがり)・遺体の仮安置(は二年二月の長期に及び、その後大内陵に葬られた。この悲劇は、大津の辞世歌と姉の追慕歌が哀切を極めるが(掲載は省略)、二十八年前の中大兄による有馬皇子処刑の悲劇を想起させる。

(二)、草壁の急逝—柿本人麻呂の挽歌

天武死の悲嘆と殯宮の悲哀の中で、六八九年四月皇位直前の草壁が二十八歳で病死した。最愛の息子を失った鷗野の嘆きは如何ばかりか、草壁即位を悲願として来た鷗野である。かくなれば何としても珂瑠皇子の即位を実現したい、それが鷗野の執念となった。

草壁に捧げた柿本人麻呂の挽歌(ほんか・死を悼む歌)がある。前半を意識すると、「天武天皇は・神のままにご統治になり・神のままに天上に上つてしまわれ」と天武を讃える。そして後半は、

我が大君 皇子の命の 天の下 知らしめし
ば・天つ水 仰ぎて待つに いかさまに 思ほし
めせか・朝言に 御言問はさぬ・皇子の宮人
ゆくへしらずも (巻二—一六七)

われらが天武天皇の皇子(草壁皇子)の尊が天下をお治めになったなら、天の恵みの雨を仰いで待つように待ち望んでいたのに、朝のお言葉をおかけになることがない。皇子の官人たちは途方に暮れている、としてその偉大な父(天武)を継げなかつた草壁を惜しんでいる。鷗野は天武を神にすることで、自らの政治基盤を固めようと、人麻呂は宮廷歌人として歌の力で天皇を神格化している。

三、持統天皇の時代

(一)、持統天皇の即位(太政大臣・高市皇子)

草壁の急逝という事態に対処するため鷗野は、六九〇年正式に即位して第四十一代持統天皇となった(四十六歳)。持統は国政を進めるため高市皇子を太政大臣、多治比嶋を右大臣に任命した(皇親政治はここで終わる)。天武の遺志を受け継いだ持統は、藤原宮遷都の大事業に取り組んだ。それは本格的な宮殿造営という一大計画都市の創造であった。

(二)、珂瑠皇子の安騎野冬獵—「かぎろひの歌」

六九一年の冬、珂瑠は立太子前の十歳で宇陀の安騎野(あきの)に狩猟に出かけた。その時お供した柿本人麻呂の詠んだ有名な歌がある。まず長歌一首を意識する。「わが大君であられる珂瑠皇子様は神様でいらっしやるから、都を後にして初瀬の山道を朝お超えになって夕方になると、雪の降る安騎の大野に、草を枕の旅の宿りをなさいませ。亡き父(草壁)のいらっしやる昔のことをお思いになって」となる。つまり、亡き父草壁を追慕する旅なのであった。次に反歌四首を掲げる。

安騎の野に 宿る旅人 うちなびき 眠(い)も寝
(ぬ)らめやも いにしへ思ふに (巻一—四六)

安騎の野に宿りをする旅人たちは、くつろいで寝ようにも寝られないでいる。亡き父君のおられた昔のことを思うにつけて。

ま草刈る 荒野にはあれど 黄葉(もみぢば)の
過ぎにし君が 形見とぞ来し (巻一—四七)



安騎野かぎろひの丘(万葉公園)
珂瑠皇子が狩をした丘陵(東を望む)

草を刈るような荒涼とした山野ではあるが、もみじの散つてゆくように亡くなられた父君の思い出の地としてやって来たことだ。

東(むがし)の野に炎(かきろひ)の立つ見えて
かへり見すれば 月かたぶきぬ (巻一―四八)

東方の野に曙光のさしそめるのが見えて、うしろを振り返って見ると、月は西方に傾いている。

日並(ひなみ)の皇子の命の馬並めて 御狽(みか)
り立たしし 時は来向(きむ)かふ (巻一―四九)

今は亡き日並(草壁)の皇子様が、馬を並べて御狽にお立ち遊ばした時刻、いまそこに来ている。

右の五首(長歌を含む)は、都を出発して安騎野に到着し、翌朝の狩が始まるまでの、時間的な流れに沿った情景である。天武が拳兵時に陣容を整えた安騎野、父草壁も訪れ今珂瑠も狩狽に来て、
持統に命じられた人麻呂が、
それらを壮大な叙事詩に詠い上げたのである。



柿本人麻呂象
(安騎野・人麻呂公園)

この冬狽は持統が、祖父の天武・父草壁の天皇霊を、孫の珂瑠に受霊させるために計画したものだと言う。新しい見立では、天武と草壁が一体となって西に落ちかかる月、その天皇霊を珂瑠は東に輝く暁の光・東から上る太陽として受霊したというのである。反歌の四首目、まさしくその時刻に日並の皇子(草壁)が馬を並べて颯爽とお立ちにられた、と締めくくっている。

持統悲願の天武―草壁―珂瑠の皇位継承の正当性を見事に天下に示した、万葉集屈指のドラマであると思う。人麻呂「かきろひの歌」の素晴らしさと、持統の執念・願望を理解したい。

(三)、藤原京へ遷都―香久山眺望の御製

藤原宮の造営は、持統即位の六九〇年十月に着手さ

れ、四年後に遷都した。規模的には大和三山をほぼ取り込むほどの、南北は五キロ余(未確定)、東西に五、三キロの広がりを持つ中に、国家儀礼の場としての大極殿を正殿とする朝堂院が設けられた、初めての瓦葺き宮殿であった。

持統天皇といえ、香久山眺望の御製が心に浮かぶ。

春過ぎて 夏来るらし 白栲(しろたゑ)の
衣干したり 天の香久山 (巻一―二九)

春が過ぎて夏がやって来たらしい。あの天の香久山に真つ白な衣が干してあるのを見ると・・・

季節感あふれる神聖な香久山の情景、干してある衣は、みそぎのための斎衣(浄衣)であろう。しかしこの歌は、藤原宮造営の地に立つ持統自身の心情を、純白の衣に託して表現した新しい決意とも見られよう。

堂々たる万葉秀歌である。



藤原宮跡(特別史跡)
天武が計画、持統が完成・遷都

(四)、持統の吉野行幸(九年度で三十一回の謎)

持統行幸地の中でも吉野は、天武と持統二人の記念すべき聖地である。持統の吉野行幸にお供した人麻呂の詠んだ二組の長・短歌がある。長歌は掲載を省略して、反歌二首を掲げる。

見れど飽かぬ 吉野の川の常滑(とこなめ)の
絶ゆることなく またかへり見む (巻一―三七)

いくら見ても見飽きない吉野の川の常滑(岩に苔が生えてなめらかなところ)のように、絶えることなくまたやって来て、この滝の都を見よう。

山川も 依りて仕ふる 神ながら
たぎつ河内に 船出せずかも (巻一―三九)

山の神や川の神までも心服してお仕えする尊い神として、天皇は吉野川の、この激流渦巻く河内に船を漕ぎ

出される。いずれも吉野宮を絶賛し、持統天皇を神として讃えている。

天武の吉野行幸は、皇子らとの盟約時の一度だけであった。しかし持統の場合は、九年度で実に三十一回を数える。具体的には、草壁が没した持統三年(六八九)から翌年の持統即位、そして持統讓位の同十一年(六九七)までである。これは一体、どういうことなのか。

持統は天武の後を継いだ国家統治者である。国の行事・儀式・祭祀を主宰し、念願とする珂瑠への讓位実現に向けて、官人有力者の支持を維持する必要があった。草壁を失った不安定な心情を、神になった天武の力を借りて奮い立たせたい。持統にとつての吉野は、為政者としての霊力を身につける「魂振」(たまふり・魂に活力を与える)の聖地だったのでないか。事実、持統の行幸前後に天武と不可分の行事や儀式が行われているのである。吉野宮滝は、心の安らぎと天皇力を得る持統のパワースポット、政治的にも必要な行幸として理解できよう。

(五)、道程は二十四キロ―芋力峠(四九七)越え

持統行幸の道程と芋力峠(いもがとうげ)については、意外と情報が少ない。コロナ禍中ではあるが、意を決して筆者はその測定と実体験を試みた。

以下はその記録である。令和三年八月二十八日(土)、近鉄壺阪山



持統天皇・吉野宮滝行幸の道
(途中の難所・「芋峠」の標識)

年八月二十八日(土)、近鉄壺阪山駅からタクシーで、県道15号線・栢森(かやのもり)―役行者像―芋力峠―上市―宮滝まで走行した(各距離記録)。平成二十一年奈良県発行の『持統天皇行幸の道』地図(五枚)を拡大コピー、藤原宮から南下して壺阪山駅―栢森線間の合流点ま

での距離を木綿糸で測定し、藤原宮―宮滝の距離は二

十四キロと計測(誤差削除)した。現県道は、芋力峠越えの古道を踏まえて開通したようだから、素人の計測であるが一応ご諒承願いたい。

芋力峠越え、については栢森一役行者像―芋力峠―千股川せせらぎ公園の途中までの約五、六キロは急坂とカーブ、昼なお暗き道である。役行者像や芋力峠では古道が県道の脇に見える。足を踏み入ると、狭路・急坂・曲折で、ひと一人がやっとの感、谷は深い。



左・古道標識、右・芋峠道掲示板

芋峠の掲示板に「古道芋峠道」と題した大養孝先生の説明文があった。「明日香村大字岡のあたりから、吉野へ歩いてゆくには、・・・芋峠までくれば、吉野の山々を一つ一つ数えることができる。空気も国原とは、とみに変わった感である。・・・持統女帝の吉野行幸道は、地形状況からいって、この道をゆくのがきわめて自然と思われる」(大養孝「万葉の大和路」より)

持統さんは、興(こし)に乗られたのか、難路はお歩きになられたのではないかと想像した。天皇が通われた峠道、その道の一端に立つ不思議な感覚、千三百年前の行路難を偲んだ。(家内同伴ささやかな快挙であった)



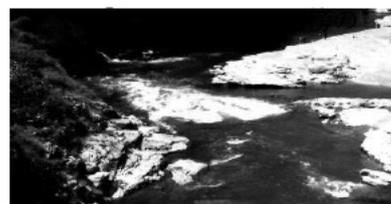
右下写真奥の古道



史跡標 役行者像

(六)、万葉讀歌―「吉野宮滝の歌」

「吉野宮」は、六五六年に齊明天皇が造営した「離宮」である。吉野川が曲流するところ、山間の水流が岩盤に当たって奔流・激流・深淵などさまさまの変化をみせる



吉野宮滝の景観(みやどころ) 右奥に離宮・「滾(たぎ)る場所だから

「水の聖地」、その傍の台地に在る。地名は吉野宮滝と言うが、滝はない。宮滝の滝は「滾(たぎ)る」に由来し、水が「たぎ」る場所だから滝なのである。険しい峠を越えれば山・川・谷・岩の景観と鳥の声、大宮人にとって吉野宮滝は、神仙境の趣ある秘境だった。

吉野讀歌八十余首の中から三首を掲げる。
わが行きは 久にはあらし 夢のわだ 瀬には
ならず 淵にあらむかも (巻三―三三五)

私の大宰府任期はそう長くはないだろう、吉野川の夢のわだよ、浅瀬にならずに深い淵のままであってほしい。わだ、は象ききの小川が吉野川に注ぐところの淵。筑紫での大伴旅人詠、望郷の念である。

山高み 白木綿花(しらゆふばな)に 落ち激(たぎ)つ
滝の河内は 見れど飽かぬかも (巻六―九〇九)
山が高いので、白木綿花のように白波が流れる(吉野の宮)滝の河内(川の地域)は、見ても見飽きることはない。白波の美しさを神聖な白木綿に見立てている。元正天皇行幸時に笠金村が詠じた。

み吉野の 象山の際の 木末(こめ)れには
こころもさわぐ 鳥の声かも (巻六―九二四)
吉野の象山の山あいの梢では、あたり一面に鳴き叫ぶ鳥の声の何と賑やかなことか。山辺赤人詠

(七)、持統讓位して文武天皇即位、持統万葉の編纂

遷都二年後の持統十年、太政大臣高市皇子が死去した。持統は、孫珂瑠の立太子を決断し半年後珂瑠皇太子に讓位した。第四十三代文武(もんむ)天皇の誕生(十五歳)である。当時の「天皇は死ぬまで在位」(即位は三十

歳以上)という慣例を打ち破って、持統は珂瑠の即位を実現した。持統の執念と剛腕の發揮である。その時に持統は父天智天皇の大功臣であった藤原鎌足の子、三十八歳の藤原不比等(ふひと)を拔擢した。そして文武天皇即位と共に、不比等の娘(宮子)が夫人となって入内した。まさに、その後の藤原氏台頭の基盤が形成された時期である。

太上天皇となった持統は、讓位後も文武を後見した。特筆すべき活動として持統は、万葉集成立の初期段階にその編集に関わっている。具体的には万葉集の巻一、後を継いだ元明・元正両女帝による巻二がそれである。この二つは「初期万葉」あるいは「母体万葉」・「持統万葉」とも呼ばれている。天皇の神格化は、万葉集によって形成されたと考えられるが、持統に密着した人麻呂は、歌を詠み編集にも関わって活躍したであろう。国家体制強化のための、文化事業であったと言える。

(八)、持統太上天皇崩御(火葬・文武天皇大内陵合葬)

大宝元年(七〇一)文武天皇の嫡子、首皇子(おびとのみこ)が誕生した。同年不比等に安宿媛(あすかへひめ)が誕生する。皇室と藤原家の協力関係は、この二人の婚姻を通じて盤石のものとなる。大宝律令が完成し、遣唐使を派遣して我が国の独立を宣言する新時代の到来であった。大宝二年持統は病床に臥し、十二月二十二日その生涯を閉じた(五十八歳)。



天武・持統天皇陵 (南面した八角形の五段丘状墳) (鎌倉時代以降2回盗掘された)

遺体は藤原宮の殯宮に一年安置され、翌年飛鳥の岡で火葬された(天皇の遺体火葬は初めて)。そして夫・文武天皇の眠る檜隈大内陵に合葬された。天武は土葬、持統は火葬、異例の組み合わせで合葬

を指示した持統の真意は何であったか。

夫婦同心一体で、嫡子草壁皇子から文武天皇へつながら皇統の重みを示したものと考えられる。波乱の人生最後まで、自己の信念を貫き通した持統であった。

四、「天皇」と「日本」の国づくり

(一)、中央集権・律令国家をめざした諸施策

天武は、◆国防軍事体制の整備に着手、「政(まつりごと)の要は軍事(いくさ)なり」として、官人に武技と乗馬の修練を命じた。◆兵士の軍団編成に取り組む◆中央集権確立のため、氏の再編と官人の階級序列化を推進・「八色の姓」「冠位二十六階」「冠位四十八階」など◆豪族が支配した民を公民法「甲子の宣」◆「五十戸」制の実施・その末端行政単位で課税◆全国的な戸籍(庚寅年籍)を作成◆徴兵制度を実施◆諸国の国境を決定◆伊勢神宮を頂点とする国家神祇祭儀の整備◆仏教の保護(薬師寺の建立など)。

持統は、◆天武と共治しながら、特に藤原宮の造営と遷都を実施した。◆口分田に基づく農地の班給◆飛鳥浄御原令の完成(官位相当性・天皇が変わっても官人の仕事は保証)◆大宝律令の完成(七〇二)◆古事記の完成(七二二)◆日本書記の完成(七二〇)◆遣唐使の派遣復活(七〇二)◆地方行政制度の整備◆持統万葉集の編纂(以上主要項目のみ列挙した)。

要するに、天武から持統へ意識統一された、本格的な国家としての「国のかたち」と「国の骨格」が作られたのである。

(二)、「天皇」号と「日本」国号の成立

「天皇」という呼称が、君主号として確立したのは天武の末年、浄御原令で法制化したものと考えられる。

飛鳥池遺跡から「天皇」と墨書した木簡が、天武朝の木簡と一緒に出土した。「大王」(おおきみ)・「王」の称号

が「天皇」(すめらみこと)に変わったのである。

「日本」の国号は大宝令で定められ、大宝二年(七〇二)の遣唐使が唐で披露している。「倭(わ)に代わって、「日本」が対外的に認知される国号となった。いずれもが、天武・持統朝に確立されたのである。

結

持統譲位後五年に、文武天皇は二十五歳の若さで崩御した。後継者は天武・持統の血筋・首皇子である。それを実現するため中継ぎとして、草壁の妃である阿門(あへ)皇女が第四十三代元明天皇として即位した。元明時代に藤原京は唐の長安に比べて狭すぎるとして、平城京に遷都した。以後平安京に遷都するまでを奈良時代と言う。元明は七一四年に首皇子を皇太子に立てたがまだ幼少のため、次の中継ぎとして娘の水高ひだか内親王に譲位し第四十四代元正天皇とした。

かくして神龜元年(七二四)、首皇太子が元正天皇の譲位を受けて即位し、第四十五代聖武天皇となった。

ここにおいて、ようやく天武皇統の皇位安定が実現した。皇后でない女性皇族や未婚の皇女の女性天皇二代の異例が通ったのは、天武王朝の実現とその継承に功あつた持統の宿願が、貴族層に理解されたからと思われる。藤原不比等抜擢に始まる天皇家と藤原氏の、婚姻を土台とした関係づくりが功を奏した。

ともあれ、古代国家が海外出兵・敗北撤退から覚醒して、中央集権律令国家の建設に邁進したのである。

それは同時に、「天皇」を中心とした「日本」という「国づくり」、新しい国家の基本的原型を創る大事業を、立派にやり遂げた時代でもあつた。

天武は律令国家の基礎を造つた実力者天皇、持統は律令政治を完成させた女傑天皇、夫婦の見事なバトンタッチを見せて全力疾走した、たぐい稀な国家指導者

であつたと言えよう。持統の万葉集誕生の切っ掛けであつた点は、もつと記憶されていいと思われる。

(横野万葉会)

付記 宮滝遺跡・史跡公園化への期待

宮滝遺跡の調査は昭和の始め頃から始まったが、近年発掘された大型建物跡は、飛鳥・奈良時代に天皇が訪れた離宮・「吉野宮」の跡地である。奈良県吉野町では、遺跡を後世に継承するため整備基本計画を策定し、史跡公園化の方向で工事に着手する予定である。筆者は平成三十年十月に家内と車で、宇陀安騎野から吉野宮滝(一泊)、藤原京跡を探訪した。その折同町の現産業観光課・中東洋行主査・当時教育委員会勤務)に知己を得た。考古学の専門家でもある同氏は本計画の推進担当者であり、令和二年同町が全国から募つたパブリックコメントには、筆者も意見を寄せた。現地には立派な案内掲示板も立つてこれからの展開が期待される。



浄御原神社
謡曲「国栖」の神秘境



吉野歴史資料館
(宮滝の近く、山側に在る)

【参考文献】・万葉の心

・天武天皇と持統天皇 大養孝 テイチク(株)

・持統天皇 義江明子 (株)山川出版社

・憧憬 古代史の吉野 瀧浪貞子 中央公論新社

・写真 写真はすべて筆者が直接撮影したものである。

【敬語】 天皇の呼称等の敬語は省略させていただいた。